

カナン人の娘が癒される出来事は(マタイ 15:28)、他の癒しの場面とはいささか違う。治癒行為を誰にでもどんどんおこなうイエスと思いきや、ここでは切実な懇願に対して拒否的だ(15:24~26)。分け隔てしないはずのイエスの拒絶が妙にひっかかる。この気に食わないところが、どうも印象に残る。

病に苦しむ娘の母(15:22)はフェニキア地方のカナン人(15:21)。癒しをおこなう旅のラビの噂を聞きつけ、叫びながら近づいた(15:22)。女にとって自らのものではないイスラエルの信仰に歩み寄り、「主よ、ダビデの子よ」と懇願した(15:22)。

これに対してイエスは沈黙し、弟子は追い払うように進言する(15:23)。やりとりの後イエスは口を開くが、それは「えっ」と思うほど冷やかなものだった。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない(15:24)」。女は怯まず、ひれ伏して「主よ、どうかお助けください(15:25)」と食い下がる。イエスは「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない(15:26)」と拒否。

女が「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです(15:27)」と応ずると、拒否的態度はガラッと変わる。イエスは「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように(15:28)」と答え、娘は癒される。

イエスへの先入観を捨て、真っ直ぐに読み、大胆に想像しよう。このやりとりで変えられたのは、女ではなくイエスの方ではないのか。イエスは無謬で不動と硬直させてはならない。弟子は頑だが、イエスの沈黙には柔らかさが感じられる(15:23)。

イエスは、己が民の「失われた羊」のために遣わされたと自覚し(15:24)、異邦の娘(小犬)に分かつパンは無いと考えていた(15:26)。ところが女の「小犬も食卓から落ちたパンはいただく(15:7)」という迫力ある機知で、イエスは、はたと気づく。「確かに、父なる神の恵みは食卓からこぼれ落ちるほどある。異邦人を養ってもなお余りあるじゃないか」と。

既存の解釈範囲を気にせず、そのまま読んだら、イエスのことがますます好きになった。権威や教会の教えに捉われない伸びやかなイエスを思い描くと、目頭が熱くなる。

それでは、神や神の子イエスは不完全なのか。決してそうではない。私たちの切実な祈りに対し、愛の神は、御自分を曲げてまで応えて下さる方なのだ。

イエスの伸びやかな柔らかさが、義よりも愛の優位を体現している。

ここには病の娘はいない。だが異邦の母は娘のために、民族的・宗教的な壁を越えてイエスに懇願した。ローマの百人隊長もそうだった。彼はそこにいない僕のために(8:6)、幾重もの壁を越えてイエスに懇願し(8:5~6)、僕は癒された(8:13)。

イエスは異邦の女の信仰を誉め(15:28)、異邦の兵士の信仰を誉めて(8:10)、不在の当人が癒された。自分だけでなく、信仰なき他者への祈りには意味がある。

不正を犯して逃亡中のヤコブは、真夜中じゅう神と格闘した(創世 32:25)。ヤコブは関節を痛めながらも諦めず、「いいえ、祝福して下さるまで離しません(32:27)」と懸命に訴え続けた。

罪深いまま、率直に祈り続けると、神は「御自分を曲げても」その人を祝福する(32:30)。

私たちの罪は赦され、神の民の条件が揃わなくても恵みが与えられる。神の愛が、神御自身の決定よりも勝っているからだ。



《おまけのひとこと》

不動なるキリストがおられ 私たちがその周囲で右往左往する それが信仰のイメージかもしれぬ そんな信仰の地動説は イエスの伸びやかさで覆されよう 人間の周囲をキリストが巡る天動説に